

ホルモン補充療法や経口避妊薬と乳がんのリスク

大規模ランダム化比較試験の結果から閉経後や卵巣機能障害に対するホルモン補充療法は乳がんの罹患リスクを増加させることが知られていますが、多くはプロゲスチン併用補充療法（CHRT：Combined Hormone Replacement Therapy）についての報告でエストロゲン補充療法（ERT：Estrogen Replacement Therapy）とは分けて考える必要があります。ERT に関する報告には一定の方向性がなく、現時点ではリスクを増加させるとはいえません。

HRT による乳がんの罹患リスク増加に関しては、他に使用期間や使用中止からの経過時間が重要で、使用中あるいは最近まで使用していた(current user)女性にのみリスク増加が認められますが、使用中止から5年以上経過するとリスク増加は認められなくなります。また容量、期間の増加に従ってリスクが増加すると考えられますが、そのリスク増加は使用中止後5年以上経過すればリスク増加は認められなくなります。HRT によるリスクの増加はハザード比で1.2～1.3程度とさほど大きくありません。また、HRTに関連した乳がんでは異型度が低く、ホルモン受容体陽性であることが多く比較的予後良好なタイプであることが報告されています。

経口避妊薬と乳がん発生リスクに関する報告には容量や使用期間、あるいは使用中止から乳がんが発生（乳がんと診断）される期間、使用開始年齢、満期妊娠以前の使用について一定の方向性は認められません。また乳がんの家族歴のある女性で避妊薬が乳がんリスクを増加させるという報告はありません。

日本人を含むアジア系アメリカ人がアメリカに移住した場合、経口避妊薬の使用率や乳がん発生リスクは増加することが言われていますが、経口避妊薬使用と乳がん発生リスク増加の関係は認められていません。